

## 家計簿記帳の効果の検討<sup>1)</sup>

### —— 大学生調査から ——

重川純子 埼玉大学教育学部生活創造講座家庭科分野

キーワード: 家計簿、記帳の効果、家計管理、金融教育、大学生

#### 1. はじめに

金融商品の増加・複雑化、長寿化や年金制度の変化などを背景に、一人ひとりの金融リテラシーを向上させることが、日本だけでなく多くの国において積極的に推進されている。日本では、年功型の賃金や退職金制度のような各人の生活設計の代行的な役割を果たしていた制度が崩れつつあり、リスクも考慮しながら経済面の長期的な計画を各自が意識的に考える必要性が高まっている。少額投資非課税制度(NISA)や確定拠出年金(iDeCo)など、各人が金融資産を増やすように投資を促すしくみも作られている。また、キャッシュレス化が政策課題に掲げられており、今後一層の進展が予測される。デジタル化によりフィンテックを活用すれば数値としてお金の動きを把握しやすくなるという側面もあるが、所持しているお金の増減を実感しにくく、意識的にお金の動きを捕捉することが必要である。

家計を取り巻く環境変化に対し、金融や生活経済に関する教育の必要性が公私問わず様々な主体により提唱されている(重川 2007、重川 2020)。金融庁金融研究センターに設置された金融経済教育研究会では、「一人の社会人として、経済的に自立し、より良い暮らしを送っていく上で、最も基本となるのが「家計管理」と将来を見据えた「生活設計」の習慣」とし、それぞれを金融リテラシーの独立した1分野にしている(金融経済教育研究会, 2013: 8)。家計管理の一手段として家計簿の記帳があげられる。家計簿は自分自身あるいは家庭の経済状況を把握するのにすぐれた手段である。三東(1977、1980)によると、既に明治期、大正期の家政書や家計簿記書においても、出納の現状把握や浪費予防、予算の資料等家計簿記の効用が掲げられている。

本研究では、大学生を対象に家計簿記帳の効果を実証的に捕捉し、家計簿記帳の意義を検討する。大学生の経済生活は、親がかりの部分も多いが、親元を離れ日常生活を維持する場合には比較的高額の金銭の管理が必要となる。親と同居している場合でも、アルバイト就労などによりそれまでに比べ高額な金銭を扱うことが多い。扱う金額が比較的大きく、責任の度合いも大きいがゆえに家計管理の必要性は高いと考えられる。Peng et al. (2007) はパーソナル・ファイナンス教育を受ける時期として高校と大学を比較し、大学で受けたグループの方が投資に関する知識が身に付いており、その一因に経済的な経験や責任が増した時期に教育を受けていることをあげている。また、Kolb の体験学習の理論にふれながら、投資に関する具体的な体験が知識の習得に強く関連している、と述べている。家計簿記帳は家計管理の基本的技能であり、記帳経験は技能習得へつながる。さらに、単なる技能習得だけでなく、記帳経験を通して教育的側面も持つと考えられ、金融や生活経済に関する教育・学習の基盤になりうる可能性が考えられる。本研究では、家計簿記帳行為の教育的側面の具体的内容を探る。また、教育的側面を持つとすると記帳しやすい家計簿の検討が必要であるため、家計簿記帳を行った大学生の意向を踏まえ、費目設定、形式についても検討する。

#### 2. 方法



本研究では広域関東圏にある6つの大学・短期大学の学生（以下、大学生と記す）を対象に家計簿記帳の協力を依頼し、記帳後に家計簿記帳に対する調査票調査を実施した（親と同居の場合、管理するのは家計ではなく個計であり「家計簿」の名称は適切ではないが、本稿では学生の個計の帳簿も含めて「家計簿」と称す）。「大学生の経済生活実態と金融教育研究会」<sup>2)</sup>のメンバーが関係する大学・短期大学で授業等を通じ家計簿記帳の協力を依頼し、記帳開始前に記帳方法と集計方法を説明した。記帳期間中・記帳後にも必要に応じ追加説明を行った。記帳には金融広報中央委員会の「家計夢ノート」あるいは生活協同組合発行の家計簿を用いた。記帳は現金支出だけでなく、クレジットカード支出、口座引き落としも含んでいる。支出の集計には表計算ソフトで作成した独自の月計集計表を配布した。集計表は、日毎の費目別合計を記入し、1日合計と費目別月間合計を計算して記入する形式である。費目立てについては、大学生の経済状況を把握するために、全国大学生生活協同組合の調査結果や学生の生活実態を踏まえ、12の大費目と食料費に9つの中費目を設定した。費目立ては以下の通りである。大費目<sup>3)</sup>：食料、住居、水・光熱、被服・化粧品・理美容、保健医療、交際、教育、教養娯楽、交通、通信、自動車・自転車関係、その他。食料費の中費目：主食的調理食品、副食的調理食品、外食（主に食事）、外食（飲み会・コンパなど）、外食（喫茶）、菓子、アルコール飲料、ソフトドリンク・水・牛乳、その他の食品。各費目に含まれる内容については、記帳開始前の授業時等に説明するとともに、集計表にいくつかの例示を行った。家計簿記帳期間は2006年6月1カ月間である（一部学生については6月から7月の30日間）。長期休業期間の存在も大学生生活の特徴であるが、本研究では通常の学業期間である時期を調査期間とした。

記帳期間終了後、家計簿記帳に対する調査票調査を実施した。調査項目は、自身の小遣い帳、家計簿記帳の経験、親の家計簿記帳状況、カードの利用・保有状況、親により直接支出されており家計簿には表れていない学生自身の生活のための費用（例：携帯電話料金、住居費）、家計簿記帳による変化の認識、家計簿の形式に対する意見等である。家計簿記帳による変化の認識については、購買行動、支出の把握および支出の仕方、貯蓄に対する意識、基本態度、経済社会への視野の広がり、親との関係、金銭の動きの可視化に関する16項目を取り上げた。これら16項目について、自己評価を行ってもらった。これらの自己評価が調査対象者のおかれている経済環境や過去の記帳経験の影響を受けているか分析を行い、家計簿記帳の効果の汎用性を検討する。経済環境としては、親との同別居、暮らし向き、クレジットカードの利用を取り上げる。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 本研究対象者の基本属性

家計簿と月計集計表を提出した者は248名、家計簿アンケート調査の回答者は254名である。1カ月完全に記帳しておらず家計簿は提出しなかったがアンケートのみ回答している者がいるため、記帳後アンケートの方が回答者数が多い。また、家計簿と月計集計表を提出した者の中にも1カ月継続していない者も含まれている。本研究では、家計簿を1カ月継続記帳・集計し、アンケートに回答した者を分析対象とする。ただし、家計簿記帳の支出月額が1万円未満の者は対象から除外し、対象者数は221名である。対象者の性別は女性91.0%、男性9.0%、学年は1年30.3%、2年60.2%、3・4年9.5%であり、女性、低学年への偏りが大きい。居住形態は、親同居54.3%、1人暮らし・寮等親同居以外（以下では、親同居以外）45.7%である。



### 3-2 本研究対象者の家計

本研究対象者の家計簿に記帳された家計実態は表1の通りである。平均消費支出月額は親同居 42,872 円、親同居以外 95,381 円と親同居以外は親同居の2倍以上の支出額である。支出内訳では、親同居以外では住居費割合が22.5%を占める。住居費を除くと、額に違いはあるが、親との同別居によらず食料、被服・化粧品・理美容、交通通信の費用が主な支出先である。全国大学生協の調査<sup>4)</sup>では1カ月の支出額（同調査の支出合計値から「貯蓄・繰越」の額を控除した額）は、自宅生

表1 居住形態別支出月額・支出割合

	実額(円)		割合(%)	
	親同居以外	親同居	親同居以外	親同居
食料	22,783	11,318	23.9	26.4
住居	21,489	0	22.5	-
水・光熱	3,404	0	3.6	-
被服・化粧品・理美容	17,837	12,813	18.7	29.9
保健医療	1,855	523	1.9	1.2
交際	1,795	1,658	1.9	3.9
教育	4,788	1,704	5.0	4.0
教養娯楽	5,413	5,201	5.7	12.1
交通、通信、自動車・自転車	11,682	6,982	12.2	16.3
その他	4,333	2,673	4.5	6.2
支出計	95,381	42,872	100.0	100.0

49,270 円、自宅外生 114,240 円であり、本調査対象の方が低く、親同居以外（自宅外生）では約 1.9 万円の差がある。これは住居費（水・光熱含む）の相違（生協調査 53,950 円、本調査 24,893 円）によるところが大きい。本調査では実際に学生自身が支出した分を捕捉しているため、親から直接支払われている分は含まれていない。後述のように住居費は親が直接支払っていることが少なくないため、本調査の額が小さくなっていると考えられる。この点を考慮すると、本調査対象者の平均生活費は全国大学生協調査の平均値と概ね近似している<sup>5)</sup>。表2には収入回答がある 113 名の収支を示している。親との居住状況によらず、それぞれ集団で捉えた場

表2 居住形態別収支月額（収入回答のある者のみ N=113）

合には黒字で、収入の 90%程度を支出している。全対象者中、奨学金を受給している率は 29.4%である。

	アルバイト収入	小遣い	仕送り	奨学金	その他実収入	収入合計	支出額
親同居	20,137	15,537	0	1,797	3,156	40,627	36,962
親同居以外	37,971	3,350	46,199	8,600	8,035	104,155	94,495

先述のように、学生の生活費用には、学生自身が支払う他に、親が子（学生）を経由せず直接支払っているものもある。記帳後の調査票調査で尋ねた結果、学生の生活費の親による直接支払いについては、親同居では 71.7%、親同居以外では 69.3%が「あり」と回答しており、親との同別居によらず高い割合を占める。直接支払われる割合が高い費目は、親と同別居ともに携帯電話（親同居 61.7%、親同居以外 52.5%）、別居の場合には住居（53.5%）、水・光熱（水道 32.7%、光熱 36.6%）である。

表3 居住形態別現在の暮らし向き

	大変楽な方	楽な方	ふつう	苦しい方	大変苦しい方	合計
親同居	9.2	27.5	46.7	14.2	2.5	100.0
親同居以外	15.2	28.3	45.5	7.1	4.0	100.0
全員	11.9	27.9	46.1	11.0	3.2	100.0
大学生協調査 <sup>注)</sup>	11.1	32.4	44.7	10.1	1.6	100.0

注) 全国大学生生活協同組合連合会 (2007) Campus Life Data 2006

居住:  $\chi^2=1.826$  df=2  $p>0.1$  (暮らし向きは「楽」(「大変楽」含む)、「ふつう」, 「苦しい」(「大変苦しい」含む)の3区分として算出)

現在の暮らし向きは、表3に示すように、約半数は「ふつう」と回答している。「楽」(「大変楽」含む)



が39.8%、「苦しい」（「大変苦しい」含む）が14.2%である。全国大学生協調査の結果と比べると、本調査の方が「苦しい」の割合が若干多いが、ほぼ同程度の分布状況である。本調査対象者中の親との居住形態別では、親同居以外の方が「楽」の割合が大きい、有意水準 10%以下では有意差は認められず、居住形態による違いがあるとはいえない。

電子マネー、クレジットカードの所有状況については、カード型電子マネーの所有率は 38.9%、クレジットカードの所有率は 36.2%である。ただし、クレジットカードについて、そのうち使用している割合は 16.7%である。これら機能の携帯電話への搭載状況については、電子マネー機能 22.6%、クレジットカード機能 1.4%、両者 3.6%である。カード型、携帯電話搭載含め電子マネーの所有率は 52.5%、クレジットカードの所有率は 39.4%である。

### 3-3 小遣い帳・家計簿の記帳経験

これまでの金銭、家計管理の経験として小遣い帳あるいは家計簿の記帳経験を尋ねた。高校生までに小遣い帳の記帳経験のある者は 42.5%である。現在小遣い帳あるいは家計簿を記帳している者は 19.9%である。現在はつけていないが、大学生になって記帳したことがある者が 34.4%おり、大学入学以降の記帳経験者は 54.3%である。

親の記帳状況については、「つけている」者が 32.1%、「以前つけていたが、今はつけていない」者が 16.7%であり、親に記帳経験があると認識している者が約半数を占めている。大学入学以降の記帳経験について高校までの経験、親の記帳状況との関連を調査した結果、いずれも関連性はみられない。表 4 に示すように、大学入学以降に記帳経験のある者（現在記帳中の者も含む）は親同居以外では 80.6%であるが、親同居の場合には 41.3%と低く、有意水準 0.1%以下で有意差がみられる。大学入学以降の記帳経験には居住形態が影響を及ぼしている。親元を離れ、生活の大部分を自分でやりくりする経験が記帳行為に結びついている、と考えられる。

表 4 居住形態別大学入学以降の家計簿記帳経験 (%)

	大学(現在or過去)記帳経験		
	ある	ない	合計
親同居	41.3	58.7	100.0
親同居以外	80.6	19.4	100.0
全員	59.4	40.6	100.0

$$\chi^2=32.24 \text{ df}=1 \text{ p}<0.001$$

### 3-4 家計簿記帳による変化の認識

家計簿記帳の効果の検討を行うため、家計簿記帳を通じた変化に対する評価を回顧的に行ってもらった。家計簿記帳によることを強調するため、調査票の質問文では「家計簿をつけることで、以下にあげるような変化がありましたか。」と、「家計簿をつけることで」に下線を付した。支出の把握および仕方、購買行動、貯金、基本態度、経済社会への視野の広がり、支出の可視化等に関する 16 項目について、4 件法で「あてはまる」、「まあまああてはまる」、「少しあてはまる」、「あてはまらない」の選択肢から該当するものを選択してもらった。元々の水準が高い（例えば、従前から購買時には必要性を十分考えていた）場合には変化を認識することは少なく、記帳前の水準を考慮する必要があるが、本研究ではその点は考慮していない。



表5 家計簿記帳による変化の認識

	得点以外(%)					
	あてはまる	まあまああてはまる	少しあてはまる	あてはまらない	無回答	得点 <sup>注</sup>
どのようなものにどの位支出しているかがつかめた	56.6	28.1	10.4	2.3	2.7	3.43
毎日支出額を確認しているので、支出を抑えた	18.6	20.8	31.2	28.1	1.4	2.30
収入を意識して、支出するようになった	42.1	25.8	22.2	9.0	0.9	3.02
特定の費目の支出が続かないように行動した	9.0	16.7	30.3	42.1	1.8	1.93
つけるのが面倒なので、支出を抑えた	11.8	16.3	27.6	43.0	1.4	1.97
何かを買う場合に、価格と質や量の関係を気にするようになった	43.0	29.4	16.3	10.0	1.4	3.07
何かを買う場合に、買う必要があるかどうか考えるようになった	33.9	30.3	23.5	10.0	2.3	2.90
何らかの目的のために貯金をしてみようと思うようになった	35.7	24.9	20.8	17.2	1.4	2.80
おつりを確認するようになった	29.9	19.0	24.0	25.8	1.4	2.54
銀行等の通帳の記帳をするようになった	21.3	15.8	19.9	40.7	2.3	2.18
経済や社会のことが気になるようになった	9.5	21.7	33.5	33.9	1.4	2.07
税金のことが気になるようになった	15.8	15.4	25.3	42.5	0.9	2.05
親の家計が気になるようになった	22.2	25.8	27.1	23.5	1.4	2.47
親のありがたみを感じた	57.0	22.2	11.3	7.7	1.8	3.31
クレジットカードで意外に支出していたことに気づいた	3.6	5.0	7.2	80.5	3.6	1.29
電子マネーで意外に支出していたことに気づいた	5.0	2.7	9.5	78.7	4.1	1.31

注) 得点: 「あてはまる」4点、「まあまああてはまる」3点、「少しあてはまる」2点、「あてはまらない」1点として平均値を算出

表5には単純集計結果を示している。「まあまあ」を含め「あてはまる」の選択率が最も高いのは「どのようなものにどの位支出しているかがつかめた」の支出把握で84.7%を占める。「まあまあ」を含め「あてはまる」割合が60%を超える項目は、「何かを買う場合に、価格と質や量の関係を気にするようになった」(72.4%)、「何かを買う場合に、買う必要があるかどうか考えるようになった」(64.3%)、「収入を意識して、支出するようになった」(67.9%)、「何らかの目的のために貯金をしてみようと思うようになった」(60.6%)、「親のありがたみを感じた」(79.2%)である。収入とのバランスを考えた支出、購買時のコスト・パフォーマンス、必要性の検討など、家計管理上不可欠な事項で変化の認識率が高い。支出の仕方に関する質問の回答を比較すると、面倒や支出額確認による支出抑制の質問に比べ、収入を意識した支出の質問の方が得点が高く、家計簿記帳が単なる節約行動ではなく収支のバランスを意識した行動へつながることを示唆している。親との関係については、直前の質問で直接的な現金支給である仕送り、小遣い以外の負担も意識化させていることが影響している可能性もあるが、ありがたみを感じる度合いが高い。ありがたみの認識と親家計の関心には弱い相関がみられるが( $r=.380$ ,  $p<.001$ )、ありがたみの認識変化に比べ、親家計への関心の変化は低い。「経済や社会のことが気になるようになった」の経済社会への関心の変化は、認識変化率の高い「価格と質や量の関係」( $r=.341$ ,  $p<.001$ )、「貯金をしてみようと思うように」( $r=.349$ ,  $p<.001$ )と弱い相関がみられる。しかし、自身の家計のやりくりが関心の中心で、自分自身の経済状況へも影響を及ぼす基礎的環境となる経済社会への関心の広がりへは必ずしもつながっていない。

居住形態、暮らし向き、クレジットカード等の各人がおかれている経済環境により変化の認識は異なるのだろうか。比較に際しては、「あてはまる」、「まあまああてはまる」、「少しあてはまる」、「あてはまらない」を順に4点、3点、2点、1点と得点化して項目ごとの平均値を算出し、一元配置の分散分析により平均得点を比較した。結果は表6に示す通りである。

居住形態については、親との同別居により管理する金銭の額、責任の度合いが異なり、先述の通り家計簿



表6 居住・暮らし向き・クレジットカード所有・記帳意向別の家計簿記帳による変化認識得点<sup>注1</sup>

		電子マネーで意外に支出していたことに気づいた	クレジットカードで意外に支出していたことに気づいた	親のありがたみを感じた	親の家計が気になるようになった	税金のことが気になるようになった	経済や社会のことが気になるようになった	銀行等の通帳の記帳をするようになった	おつりを確認するようになった	何らかの目的のために貯金をしてみようと思うようになった	何かを買う場合に、買う必要があるかどうか考えるようになった	何かを買う場合に、価格と質や量の関係を気にするようになった	つけるのが面倒なので、支出を抑えた	特定の費目の支出が続かないように行動した	収入を意識して、支出するようになった	毎日支出額を確認しているので、支出を抑えた	どのようなものにどの位支出しているかがつかめた
居住	親同居	3.45	2.34	3.04	1.83	1.85	3.08	2.95	2.82	2.63	2.08	2.13	2.15	2.45	3.24	1.25	1.21
	親同居以外	3.41	2.25	3.01	2.01	2.11	3.05	2.83	2.81	2.39	2.28	1.98	1.93	2.52	3.39	1.31	1.41
	F値の有意確率(p)					+											
注 向 暮 ら し	楽な方	3.43	2.25	2.86	1.92	1.95	2.87	2.76	2.48	2.40	2.12	2.09	1.87	2.47	3.29	1.29	1.28
	ふつう	3.49	2.36	3.11	1.96	2.07	3.12	3.05	2.95	2.63	2.20	2.01	2.09	2.39	3.27	1.30	1.35
	苦しい方	3.19	2.26	3.19	1.81	1.65	3.48	2.84	3.23	2.61	2.37	2.16	2.35	2.74	3.52	1.19	1.20
	F値の有意確率(p)						*		**				+				
カ ク レ ジ ッ ト 所 有 ト	保持、使う	3.71	2.68	3.11	1.92	2.03	2.78	2.65	2.64	2.31	2.67	1.97	1.76	2.41	3.28	1.83	1.56
	保持、使わない	3.40	2.26	3.26	1.81	1.91	3.47	3.07	2.81	2.51	2.19	2.07	2.00	2.53	3.28	1.17	1.19
	非保持	3.37	2.21	2.92	1.95	1.97	3.02	2.93	2.83	2.62	2.05	2.10	2.14	2.48	3.33	—	1.27
	F値の有意確率(p)	+	+				**				*					**	+
注 記 帳 意 向	このまま継続	3.62	2.42	3.16	2.32	1.89	3.16	3.11	2.84	2.59	2.43	2.30	2.05	2.65	3.30	1.33	1.24
	費目分けをかえ、継続	3.48	2.36	3.55	1.64	2.07	3.52	2.98	2.84	2.44	2.31	2.02	1.98	2.68	3.51	1.23	1.40
	非継続、記帳意向あり	3.41	2.35	2.95	1.80	1.91	3.00	2.82	2.80	2.61	2.18	2.03	2.03	2.43	3.32	1.20	1.26
	記帳意向なし	3.18	1.91	2.32	2.09	2.06	2.56	2.76	2.65	2.32	1.74	1.94	2.15	2.09	3.00	1.41	1.32
	F値の有意確率(p)			**	**		**				+		+				

注1) 得点:「あてはまる」4点、「まあまああてはまる」3点、「少しあてはまる」2点、「あてはまらない」1点として平均値を算出

注2) 暮らし向き「楽な方」には「大麥楽な方」、「苦しい方」には「大麥苦しい方」を含む。

注3) 記帳意向「非継続、記帳意向あり」＝「今回は続けないが、またつけてみたい」

注5) 記憶意向「非継続、記憶意向あり」=「今回は続かないが、またつけてみたい」、  
「記憶意向なし」=「今のところ、つけてみたいとは思わない」

\*\*p<0.01 \*p<0.05 +p<0.1 空欄は有意水準10%以下で有意差なし

\*\*p<0.01   \*p<0.05   +p<0.1   空欄は有息水準10%以下で有息差なし

記帳経験は異なるが、家計簿記帳による変化の認識にはほとんど差は認められない。暮らし向きとの関係では、

「何かを買う場合に、価格と質や量の関係を気にするようになった」、「何らかの目的のために貯金をしてみようと思うようになった」の項目で有意水準5%以下で有意に「楽な方」の得点がそれ以外に比べ低い。楽ではない暮らし向きの場合に、家計簿記帳が商品の吟味や貯蓄の可能性の気づきにつながることを示唆される。表7に示すように、重回帰分析においても、暮らし向きが苦しい方が、貯蓄してみようと思う傾向が示されている。クレジットカードの所有との関係では、保持していて使っている場合には使っていない場合に比べ「クレジットカードで意外に支出していたことに気づいた」の得点が高いものの、得点の水準は低い。対象が学生であり、「意

表7 貯蓄意向\*への影響要因

	$\beta$	t	P
(定数)		1.475	0.142
学年	-0.114	-1.584	0.115
性別(男性=0)	0.005	0.070	0.945
住まい(親同居以外=0)	-0.058	-0.830	0.407
暮らし向き	0.136	2.003	0.047
収入意識して支出*	0.154	1.865	0.064
価格と質・量*	0.074	0.869	0.386
必要性検討*	0.090	1.188	0.236
額確認で抑制*	0.083	1.150	0.252
支出把握*	0.127	1.854	0.065
現在の記帳(記帳なし=0)	0.041	0.604	0.546
調整済みR <sup>2</sup>	0.142		
F値(p)	4.43(.000)		

暮らし向き:「大変苦しい方」を5、1刻みで「大変楽な方」を1

\*の項目:「あてはまる」を4、1刻みで「あてはまらない」を1



外」な程の支出自体があまりないことがその一因と考えられる。有意水準10%以下であるが、保持して使っている場合には支出の額・内容の把握、支出額確認による支出の抑制の項目の得点が高く、可視化による支出（使いすぎ）抑制効果があると考えられる。

表 8 家計簿記帳の継続意向

		(%)				
		このまま継続	費目分けを かえ、継続	続けない が、記帳 意向あり	今のところ 記帳意向 なし	合計
居住	親同居	14.4	16.1	56.8	12.7	100.0
	親同居以外	20.8	25.7	34.7	18.8	100.0
現在の 家計簿記帳	つけている	50.0	45.5	2.3	2.3	100.0
	つけていない	9.2	13.8	58.0	19.0	100.0
全員		17.4	20.5	46.6	15.5	100.0

居住:  $\chi^2=10.765$   $df=3$   $p<0.05$

現在の家計簿記帳:  $\chi^2=80.611$   $df=3$   $p<0.001$

今後の家計簿記帳の意向に対する回答は、家計簿記帳への総合的な評価と捉えることもできる。自ら記帳に何らかの意味を感じているからこそ、記帳継続を表明していると考えられる。記帳意向の分布は、表8の通りである。何らかの形で継続意向を持つ者は37.9%と半数以下である。今のところ全く記帳意向のない者は15.5%で、約半数の者はいつか機会があればと考えている。現在家計簿を記帳していない者で継続記帳意向を持つ者は23.0%であり、今回の記帳経験の呼び水効果は必ずしも大きくない。しかし、継続はしないが記帳意向のある者が約6割おり、現状での必要性は感じないものの記帳そのものの意義は何かしら感じていると考えられる。

記帳意向別に変化の認識を比較すると、記帳意向のない者は全体的に変化の認識が低い(表6)。「収入を意識して支出するようになった」、「価格と質や量の関係を気にするようになった」では統計的に有意に変化の認識が低い。これらの項目では、継続意向の者の平均得点が高く、これら変化を認識した者が記帳継続につながる可能性が示唆される。

家計簿記帳方法の理解について、「家計簿のつけかたはわかりましたか」と尋ね、主観的な評価を行ってもらった。回答分布は、「よくわかった」19.5%、「だいたいわかった」71.5%、「あまりわからない」7.7%、「わからない」0.5%である。概ね理解されているが、1割弱の者は十分理解しておらず、今後不明内容を調査し適切な指導方法を検討することが必要である。

### 3-5 家計簿の記帳形式

今回の記帳では、先述の通り食料費の中分類も含めるとかなり細かな費目分類をしてもらった。大学生として家計簿をつける場合の費目の区分について、必要性を尋ねた結果、79.2%が何らかの費目区分が必要と回答しており、支出合計のみでなく、内容の把握に意味があったと考えられる。費目区分の要不要別に「何にどの位支出しているかつかめた」の平均値を比べると、必要(3.48)は不要(3.24)に比べ高い( $t=-1.79$ ,  $p<0.1$ )。

支出内容を把握できたと実感している場合に費目設定が必要と考える傾向が示唆される。必要と回答した者に、今回の費目区分を参照して必要な費目をあげてもらった。支出全体の費目数の平均は6.5(標準偏差3.3)であり、表9に示すようにばらつきが大きい。具体的な費目立ては表10に示す通りである。食料費が87.5%と最も高い。その

他、親との同別居を問わず支出割合が高い被服等ファッション関係、交通通信関係をあげる

表 9 必要と考える費目区分数の分布

(%)								
2	3	4	5	6	7	8	9	10以上
13.8	7.2	11.8	9.9	11.2	9.9	7.2	6.6	22.4



割合が高い。その他にあげられている費目はばらついており、各人が生活実態に応じて選択していると考えられる。食料費の中分類の費目数の平均は4.7（標準偏差2.3）である。具体的費目は表11に示すように、菓子が最も多く46.3%、次いで一般外食の45.5%である。調理食品については、主食的と副食的別立ての設定の他、両方あわせて1つの費目として設定する場合を加えると過半数の者が設定を必要と考えている。

家計簿の形式・記帳方法の希望として、日記欄、パソコン上での記帳、カード利用支出の費目別月間集計サービス、その他（自由記述）について尋ねた。3つの中では日記欄が最も多く56.6%、次いでパソコン上での記帳37.1%である。カードは支払い手段としての利用が必ずしも多くないため

か集計サービスは16.3%と低い。市販の家計簿には日記欄が付いているものもみられるが、大学生の場合にも、数字での1日の経済活動の振り返りを行為である家計簿の記帳とあわせて、文字・文章で振り返りを行いたいと考えている者が多い。

### 3-6 家計簿の記帳継続に有効な方法

家計簿を継続して記帳するためには、各人がその必要性を認識する内発的動機が有効であると考えられる。しかし、実際には必要性を意識しても実行できないことも少なくない。本研究のように外発的動機により行った場合の方法が参考になると考え、記帳継続に有効であった事項を尋ねた。設定した項目は、携帯電話へのメモ、手帳・ノートなどへのメモ、友達と報告しあう・励ましあう、レシートの受け取り、だいたい決まった時間の記帳である。

表12に示すように、レシート受け取りは有回答者の99.5%が行っており、そのほとんどが有効（「やや」を含む）と回答している。レシートには詳細な買い物内容が記載されていることが多く、今回の調査では、記帳者自身が支出内容を20の費目に分類する必要があったことも影響していると考えられる。手帳等へのメモ、携帯へのメモは「やや」を含めると、各61.5%、44.4%の者が有効評価である。少なくともいずれか

表10 必要と考える費目

(%)			
費目	選択率	費目	選択率
<b>食料</b>	87.5	<b>通信</b>	28.3
<b>住居</b>	36.8	<b>自動車・自転車関係</b>	23.0
<b>水・光熱</b>	42.8	住居＋水・光熱	12.5
<b>被服・化粧・理美容</b>	50.7	交通＋車関係	9.9
<b>保健医療</b>	37.5	交際＋娯楽	15.8
<b>交際</b>	34.9	被服	7.9
<b>教育</b>	35.5	化粧	7.9
<b>教養娯楽</b>	38.2	理美容	6.6
<b>交通</b>	48.7	設定以外項目あり	23.0

ゴシック太字体の費目は家計簿記帳調査で設定していた費目  
 プラス(+)で結んだ費目はあわせて1つの費目として設定すると回答した費目  
 選択率は費目設定が必要と回答した人数に占める割合

表11 必要と考える食料費の費目

(%)			
費目	選択率	費目	選択率
<b>主食的調理食品</b>	32.3	<b>アルコール以外の飲料</b>	30.1
<b>副食的調理食品</b>	25.4	主食調理食品＋副食調理食品	31.1
<b>一般外食</b>	45.5	一般外食＋飲み会＋喫茶	15.6
<b>飲み会</b>	40.3	一般外食＋喫茶	10.5
<b>喫茶</b>	24.1	一般外食＋飲み会	6.0
<b>菓子</b>	46.3	アルコール＋非アルコール	16.3
<b>アルコール飲料</b>	27.8	設定以外項目あり	21.6

ゴシック太字体の費目は家計簿記帳調査で設定していた費目  
 プラス(+)で結んだ費目はあわせて1つの費目として設定すると回答した費目  
 選択率は費目設定が必要と回答した人数に占める割合



一方へのメモを有効（「やや」を含む）と回答した割合は70.6%である。レシートが発行されない場合にメモをしていたと推察される。この他、決まった時間の記帳も無回答を除く回答者の過半数が有効（「やや」を含む）と回答しており、継続には生活の中でリズム化することも有効である。

表 12 家計簿の記帳に有効な方法

	有効	やや有効	有効とはいえない	行っていない	無回答	合計
携帯電話にメモする	22.2	22.2	8.1	38.0	9.5	100.0
手帳、ノートなどにメモする	34.4	27.1	3.2	24.4	10.9	100.0
友達と報告しあう・励ましあう	10.4	23.5	13.6	41.6	10.9	100.0
レシートをもらう	79.2	9.0	1.4	0.5	10.0	100.0
毎日だいたい決まった時間に記帳する	18.6	26.7	7.7	35.7	11.3	100.0

#### 4. まとめ

本研究では、大学生を対象に1カ月の家計簿記帳を行ってもらい、家計簿記帳の意義を記帳者の自己評価により測定した。その結果、支出の内容と金額の把握、収入とのバランスを考えた支出、購買時のコスト・パフォーマンス、必要性の検討について変化したとする者の割合が高いことが明らかになった。これらの事項は家計管理、購買行動を行う上で、基本的で不可欠な要素である。この傾向は親との同居者、別居者ともにみられ、大学入学以降の記帳経験の有無や通常扱うお金の多少によらず記帳に効果があるといえる。家計簿記帳経験により記帳方法の習得の他、家計管理や購買行動の基本的態度を習得しており、家計簿記帳行為には記帳方法習得以上の教育的効果があるといえる。楽ではない暮らし向きの場合にも、家計簿記帳行為が「何らかの目的のため貯金ができそう」という意識を抱かせていた。本研究ではどの程度の将来か定かではないが、家計簿記帳が経済生活において現在の生活と将来の生活をつなげて考える契機にもなっていると考えられる。また、クレジットカード使用者には金額を確認することで支出を抑える効果が示唆された。金銭の流れを可視化することで家計簿記帳に使いすぎ抑制効果があり、金銭の流れの非可視化が進展する中での家計記帳の意義が定量的に確認された。

家計簿記帳は経済社会への関心には必ずしもつながらなかったが、変化の認識率の高い項目と弱い相関がみられ、授業等で両者をつなぐ働きかけがなされれば、経済社会への関心の広がりにつなげる可能性があり、その方法の検討が必要である。家計簿の形式として、適当な費目設定と日記欄が望まれていることが明らかとなった。記帳継続には、レシート受け取り、メモの他、生活の中でのリズム化することが有効であった。

本研究の調査対象者は性別が女性に偏っているため、性別の比較は行っていない。今後、男性も含めた検討が必要である。本研究では、効果の認識を測るために記帳後に調査を行った。自発的に効果を認識していた者だけでなく、事後調査が効果を認識させる機会になった者もいると考えられる。授業で取り上げる場合には、記帳方法を学習するだけでなく、記帳後に、変化したことを意識させ、家計管理や購買行動上での意味を確認できる機会が必要と考えられるが、この点の検証も今後の課題である。

#### 注

1. 本稿は、大学生の経済生活実態と金融教育研究会で作成した報告書『若者の生活設計および金融教育のための



家計調査方法の開発』の中の拙稿をもとに、分析を加え加筆修正を行ったものである。

2. 本研究会は日本家政学会家庭経済学部会関東地区会有志によるものである。

3. 交際費は総務省の家計調査ではその他の消費支出、全国大学生協調査では教養娯楽費に含まれているが、今回の調査では別途費目立てをした。教育費には、文具、授業関係書籍、ダブルスクール、資格取得を例示し、勉学関係の費用が含まれる。

4. 本調査実施と同年の10～11月の全国の81の4年制大学の学生に調査。家計簿式の調査ではなく、授業料以外の平均的な1カ月の生活費の金額を費目別に尋ねている。住居費（水光熱費を含む）については、「別途振込まれる金額を含む」と注記されている。

5. このことは、回顧式による家計支出の調査の有効性を示すものでもある。

#### 謝辞

本調査は(財)簡易保険文化財団（現(公財)かんぽ財団）平成18年度研究助成を受けた「大学生の経済生活実態と金融教育研究会」（代表上村協子）の中で実施したものである。

#### 参考文献

金融経済教育研究会（2013）『金融経済教育研究会報告書』金融庁金融研究センター

三東純子（1977）「家計簿記に関する史的考察第2報」『東京家政学院大学紀要』17, pp.13-22.

三東純子（1980）「家計簿記に関する史的考察第3報」『東京家政学院大学紀要』20, pp.13-22.

重川純子（2007）「家庭経済教育の今日的必要性」『家庭経済学研究』20, pp.25-30

重川純子（2020）「生活経済の教育」『改訂新版 生活経済学』放送大学教育振興会, pp.269-285

全国大学生生活協同組合連合会（2007）『Campus Life Data 2006』

Peng, T.-C. M., Bartholomae, S., Fox, J. J., and Cravener, G. (2007). The impact of personal finance education delivered in high school and college courses. *Journal of Family and Economic Issues*, 28(2), 265-284.

大学生の経済生活実態と金融教育研究会『若者の生活設計および金融教育のための家計調査方法の開発』

(2021年9月30日提出)

(2021年11月10日受理)



# **The Impact of Keeping Personal Account Book on University Students**

**SHIGEKAWA, Junko**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

We examined impacts of keeping account books on university students quantitatively by surveying their self-evaluation. Collected students of six universities kept personal account books for one month in 2006. In keeping account books, they classified their own expenditure (expenditure classification is 14, food classification is 9). We examined their awareness of change through keeping account books using a self-administered questionnaire. In the questionnaire, we asked 16 questions related to purchase attitude, relationship to parent(s), expense method, saving attitude, and visualization of money, and so on. It was found that the samples felt large change in balancing income and expense, consideration of needs at purchase, grasp of amount and contents of expense, and consideration of cost performance by keeping account books, regardless of the residence situation with parent(s), experience of keeping personal account book, and the amount of managed money. These results imply that keeping account books has educational impacts on university students for enhancing their awareness on the purchasing and the personal finance management.

**Keywords :** personal account book, impact of keeping account book, personal finance management, personal finance education, university student